

# 現代詩



透きとおる

おぐり あつこ

子牛

坂倉玲子

きみの寝顔をみながら

洗濯物をたたむ

ちいさな肌着をハンガーから外し

ちいさな靴下を手のひらにのせて

とつぜん泣きだしても

大丈夫よ・・と

かけよれば

にこつと笑いだす

さつきまでの涙が

さらさらひかる

言葉を持たなくても

きみの心から優しく

しほりだす声の透明さに

わたしの心も透きとおる

テレビで 子牛を見ました

ああ あの子牛・・・

やんちゃな子供だった遠い日―

よその畑につながっていた子牛

そつと たづなをとつたら

とことこ歩いてくれた子牛

そこのお兄さんに見つかつて

しかられてしまった

だまつて たづなをかえして

言い訳もしないで 見つめていた子牛

あの時の かわいい子牛

あの時と同じような子牛でした

## 雨の祭り

坂田 真希子

わたしが世界を呪う前に  
美味しいシユークリームを食べさせて

散らかった部屋

壊れたテレビ

乾かない洗濯物

雨の湿気の上に湿気を降らせ

わたしを部屋に閉じ込める

雲の上は晴れている

雨は必ずいつか止む

それが何だつていうの？

降り止まない雨

雨

知ってるのよ

なるようになるって

世界が水浸しになる前に

雨は止むって

スージー

佐藤 裕一

スージーが飲んでいたお椀の水を

今朝も新しい水に置き換える

スージーがトイレ代わりにしていた

ゲージの中に

今朝も新しいトイレシートを敷き詰める

スージーは写真の中で笑顔を見せているが

今朝も遠吠えの声は聞こえて来ない

スージー

天国でも元気だね！

(スージーは、昨年十月に亡くなった

我が家のビーグル犬です)

えん

曇  
月

名  
荷

チズコ・W・ホエール

その夏は凍えるやうに暑かった  
消え損ねた煙草の先は  
ぼうぼうと赤い光を放つてゐる

その紫煙は落ちるやうに燻つてゐた  
遠くに見える入道雲

—あ、陽が落ちる・・・

その空は燃えるやうに黙つてゐた  
夕立風に誰かが  
火を放つた

その夏は、凍えるやうに暑かった

地際の 葉かげで  
次から 次へと  
芽が出て 咲き出す  
みょうがの 花

今が

華よと

精一杯 咲く

皮を むくと

つゝんと 土の香

泥に かぶつて

これでもか と

自己主張

たねをまく風

畠山知寿子

こころの谷間に 吹きゆくこの風は  
だれかが残した 道すじさわり吹く  
こたえを待っても 吹きゆくこの風に  
途方にくれては 道すじ見うしなう

忘れないでいて 生まれた夢を  
忘れないでいて 生まれた意味を

孤独な笑顔に いつしかこの風が  
やさしく包んで くれると日々願う

あなたが育った 時代は生きづらく  
時々冷たく “ひとり” を押しつける

こころの谷間に 吹きゆくこの風は  
だれかを抱きしめ あしたのたねをまく

大人になった私たち

ひまわり

大人になった私たちは、いつもどこかで横にいる  
誰かを気にしてしまう

共感であれ、批判であれ、それがあつて時に  
に安心し、時に不安になる

喜び、悲しみは生きていくスパイスになるけれど  
喧騒から離れて、一人静寂の中にたたずむ時、  
空の青さ、風の心地よさ、草花の輝きに、気が  
つくだろう

今、ここにある、ことへの喜びをかみしめること  
ができるだろう

だから、ちよつと心が疲れたら窓を開けて風を  
感じてみよう

そよそよと吹く風は、優しく心を包みこんでく  
れるだろう

おだやかな時の流れが、心をあたたためてくれる  
だろう

愚痴

冬 園 ハク

もしこの世に才能なんてものがなかったなら

どれだけ生きやすかっただろうか

皆にチャンスが平等に与えられていたなら

どれだけ素敵だっただろうか

才能なんて言葉がどれほどの人の首を絞め

どれほどの夢にひびを入れてきたのだろう

こんな文字列に逃げ場を作ってしまう僕でも

幸せになれる世界だったら良かったのになあ

うつる

水 舞 琴 美

トランクに 青空映って始まって

住むところ 移って一人になっちゃって

シヨウインドウ 映った姿はあの頃と

何かが絶対ちがってた

アルバムに 思い出の一ページ写ってて

人の気持ちは移り行き

大好きな キミの口癖知らぬ間に

私に移って住みついて

電話越し あくびは移って温かく

春夏秋冬移り行く

## スズムシ

村上 きょうこ

夜半の窓辺

カゴのなかでしきりに鳴くスズムシ

リーン リーン リーン

部屋いつばいに響く

幼虫からニセンチほどの成虫へ

待ちにまつた鳴き声

スズムシの好物はナスにカボチャ

ニボシをはじめてやった夜

一匹が仲間を奇襲した

広い野原だったなら……

ごめんね スズムシさん

傷ついたスズムシ

日が過ぎてても

しっかりと生きています

## 時代はあなたを呼んではいけない

山田 にしこ

人工知能が進化するであろう

未来の凶を

まるで

ネコ型ロボットの近未来に重なるように

行き交う時

世界地図は無用の長物となり

歴史保存地区が

唯一 人の歩く事を許される

デジタル暦のゲイトが

私たち人間の生きる基本的権利をも奪う

AIに長けた者だけの世界を

創り上げようとする

人類の進歩というものは

換言すると

人類の破滅につながるようにもみえる